

シンポジウム／「口承文芸研究は都市伝説をどう扱うか」

## 都市伝説と「経験」

山田 巖子

はじめに

一九八八年にUrban legendの訳語として示された「都市伝説」ということばは、日本にもたらされた「新語」であった。<sup>①</sup>「都市伝説」ということばに刻まれている「歴史」について考えるため、身近な人々に「都市伝説」ということばをいつ頃知ったか、と尋ねたところ、その中の一人である大学教員（一九五八年生まれ、男性）は、次のように答えた。

「ドーベルマンの話の頃。でもはじめの頃は、学生が全然「都市伝説として」対象化できてなくて。本気で信じていたもの。マクドナルドの猫肉とか」<sup>②</sup>（内は筆者の補足）

この返事には注釈が必要であろう。

「ドーベルマンの話」とは、次のような話である。帰宅した主人が、飼う犬のドーベルが何かをのどに詰まらせて苦しんでいるのを発見する。その後、クローゼットの中に、侵入者（泥棒）

が潜んでいるのを見つけたが、彼の指は一本、食いちぎられていた。

この話を収録したアメリカの都市伝説集『チョーキング・ドーベルマン』の原著はアメリカでは一九八四年に刊行され、日本では一九九〇年に翻訳されている。<sup>③</sup>また、「マクドナルドの猫肉」とは、松本信広が一九四八年に「神話伝説」で紹介して以来、長く命脈を保つ「外食」に対する警戒心を高める噂の系譜と関わるものであり、今日においては「都市伝説」として認識されているものである。<sup>④</sup>

この男性の話の中では実は明らかな転倒が行われている。話し手は「都市伝説」を「よく知られた虚構の話」として語り、そのような話を「対象化」できず、「都市伝説」を信じていた学生を笑っているのだが、それらの話が「笑うべきもの」とされるのは「都市伝説」ということばが浸透し、そのように認定されてからである。このことばは当初、「同時代に信じられていくこと」をまさに「対象化」するための「道具立て」であった。

「都市伝説」ということばはあつという間にマス・メディアに使い回され、「見慣れた、うんざりするもの」へと変貌していく。<sup>⑤</sup>しかし、「見慣れた、うんざりするもの」を「異化」していくのもまた「談話の技術」である。手垢にまみれた「都市伝説」ということばがどのような形で「精彩を放つ」使い方をされているのか、同時代の状況を把握してみたい。これは、その内容で蒐集、分析されてきた日本の「都市伝説」研究に対して、

「今さら」「都市伝説」を發することに意味がある「場」を探す試みである。

## 一 都市とメディア

同時代の状況について触れる前に「話」に影響を与えるメディア状況について、「都市伝説」ということが人口に膾炙する以前の状況について触れておきたい。<sup>6)</sup>

初期の世間話研究では「笑話」と「奇事異聞」に主な関心が寄せられてきたことが知られている（大島 一九六三）。このことは一方では、談話の技術が、この方面に發達してきたことを示している。「笑話」について考える時に、まず考えなければいけないのは、都市的なメディアである「落語」の存在である。また、「奇事異聞」について考える際には、珍しい「事件」を報じるメディアの存在と「事実の虚構化」について問題にしなければならぬであろう。個々の話に直接的な影響関係はなくとも、そのようなメディア状況を「所与のもの」として、語られた「話」はそれらとともにある、ということが前提となる。

まず、落語と生活世界の関わりについて考えてみたい。一八九四年（明治二七）生まれの漫談家の徳川夢声は、自身と落語との関わりを次のように記している。彼は尋常小学校四年生から、高等一年生に移る頃、「雨の日の体操の時間」をきっかけに、苛められる側から脱却した、という。その時間は、級

友たちと交互に教壇に登り、「お伽噺」をしあう時間であったが、夢声少年は、寄席で聞き覚え、のちには速記本で仕入れた「落語」を次々に披露し、一躍人気者になった（徳川 一九六二・一九八七 一三三頁）。

この夢声少年と同時代を生きた人々の「声」が、世間話研究で「資料」として採集されている。中島恵子は一九八〇年代に東京都大田区の口承文芸調査を行い、一九八三年の段階でおよそ五四〇の話を探集していた。この時の話者たちのリストを見ると、明治二〇年代から大正時代の生まれの人々が並んでいる（大田区社会教育部編 一九八六）。中島は大田区を「都市近郊」と位置づけ、これらの話を見る視点として、①江戸時代の隨筆などの題材との共通性、②新しい事物を受け入れる際の思い違いの話題、③交通機関の發達、宅地整理、都市施設の整備に伴う古い話の再生、の三点を挙げている（中島 一九八四）。

例えば、②については、サーチライトを三千年の劫を経た貝の昇天だと思ったり、アメリカから輸入された食用蛙の鳴き声を聞いて大蛇の化け物と勘違いしたりする話が紹介されている（中島 一九八四 一二三頁）。「思い違い」は落語などでもおなじみの話の「型」であり、新しい経験を笑い話にしてゆく話法は、話者たちには慣れ親しんだ話法であったことが分かる。それは「江戸的なものの残滓」というわけではなく、このような語り方は彼等にとっては同時代的な「教養」の中にあつたことに留意しなければならない。落語の全盛期は明治時代である。

一方、「奇事異聞」として語られる世間話の一側面については、近世文学研究者の日野龍夫の論致が参考になる。日野は、江戸中期以降、瓦版や歌謡、演劇の発達に伴って、実際の事件が劇的に仕立てあげられていく一方で、虚構の話に、実際の事件が下敷きにされるといった、虚実がないまぜになったメディア状況が成立していたことを記している（日野 一九七七）。このような状況は幕末の「読売」と呼ばれる唄のパフォーマンスを経て、大正、昭和のニュース歌謡といった分野に受け継がれていく（グローマー 一九九五）（西沢一九九〇）。

西沢爽の「ニュース歌謡時代（大正瓦版歌謡時代）」をひもとけば、数多の心中事件が、個々の事情や当事者の内面に踏み込むことなく、「型」を通して処理され、把握されていることが理解できる。文学者の有島武郎の心中すらも、それらの「類型」の中の一つになり、他の事件と表現上は見分けがつかない（西沢 一九九〇）。

東京都小平に年一九〇三年（明治三六）に生まれた女性は、玉川上水で心中事件があるたびに、「一つとせ」という唄に仕立てて事件を印刷した紙片を売りに来る者がいたことを記憶している。ある時、その唄を覚えて隣家の客人に歌ったところ、客人は「あら上手だねえ」とほめてくれたが、その人は、心中事件の当事者の姉であったという（山田 一九九五 二五一―二五二頁）。

虚構を通して「現実」と出会うという、メディアと生きられ

た世界との交錯は、「都市的な状況」として留意されるべきものである。落語や読売といったメディアを通じた大衆文化と生活世界の関係を考える際に、柳田國男の仕事から発想された鶴見俊輔の「限界芸術」論が示唆に富む。「口承文芸」という領域を鶴見のいう「限界芸術」という概念で把握することの有効性を小池淳一は二〇〇〇年に「世間話研究の可能性」の中で指摘していた（小池 二〇〇〇）。

鶴見は今日の用語法で「芸術」と呼ばれている作品を「純粋芸術」と呼び、それよりも俗悪なもの、非芸術なものと考えられているものを「大衆芸術」と呼び、芸術と生活との境界線にあたる作品を「限界芸術」と呼んだ（鶴見 一九九九）。このような三つの領域を措定すると、なぜ、世間話が「笑話」と「奇事異聞」の方向に発達したか、その理由が明らかになるであろう。それらは情報伝達ではなく、生活の中の美的なコミュニケーション（限界芸術）であったからである。そうであればこそ、大衆芸術に影響を受け、また大衆芸術を生み出す沃野にもなったといえる。

「都市伝説」を考える際にも、この限界芸術と大衆芸術との流動性は重要である。生活世界にあったものが、「学問」として採集、分類、把握されると同時に、娯楽としてテレビ、ラジオ、ネット、書籍で拡散され、それらがまた生活世界に還元され、それぞれの場にあつたようにカスタマイズされ、話されてきたのである。<sup>(8)</sup>

## 二 ツイッターにおける「都市伝説」化と話法

「都市伝説」の語は既に二四年を経過した。若者文化と距離を置いて久しい筆者には、「都市伝説」という単語を用いる話の場を二〇一二年現在、日常には持つていなかった。筆者が改めてこのことばに遭遇したのは、ツイッター(Twitter)という媒体を通してであった。

このような媒体を取りあげる時に、なぜその媒体を取りあげるのか、その前提について論じなければならぬと考えられる。まず、挙げられるのは、「都市伝説」を論じる前にこの「媒体」が筆者の「日常」に入り込んでいたからである。現在の都市的な環境に生きる生活者の日常は、ネットの世界ときれいに分離できるような世界ではない。次にはこの媒体は後述するように、談話的な性格を有しているからである。

ここで、ネットには使用する人の身の丈を超えてゆく膨大な量の情報が渦巻いているのではないか、そのようなものを民俗学が捕捉することが可能なのか、という問いが生じるかと推測される。それについては一定の留保をつけておきたい。

大月隆寛は、『消えるヒッチハイカー』の「解説『都市』とフォークロア」において「都市」とはそのような身体の大きさを超えてゆかざるを得ない仕掛けが、自身のあざかり知らない場所のそこで無数に仕掛けられてゆく状態なのだ。大量に

作られる均質な『もの』は、その『もの』が「量」として形作る世界でまた新たな意味を不断に付与され、僕たちの生活世界を編み上げてゆく」と述べている(大月 一九八八 二八七頁)。

この「身の丈」を超えてゆく「仕掛け」を実感するのがネットの上での情報である、といえる。しかし、ネットを使いこなすのが人間である以上、自身の「身の丈を超える」程度には限界がある。ツイッター上でどれほどの量の書き込みが交わされようと、生身の人間が関心を持ち、読み得る情報はわずかである。また「身の丈」を超えた情報は生身にダメージを与える。このこともまた、自身の「身の丈」を明らかにする「情報」の一つとなるであろう。

ここで組上に挙げるものは二〇一二年四月一日から六月一日までの筆者のネット上のやりとりから想を得たものであり、情報選択の段階で既にバイアスがかかっていることが前提である。

ツイッターをよく知っている人には言わずもがなの、このメディアの特性を挙げておこう。ツイッターとは、インターネット上で、不特定多数または特定の人に向けてごく短いメッセージを発信したり、他の人のメッセージを読んだりすることができる簡易ブログの一つである。米国オブブリアス(現ツイッター)社が二〇〇六年にサービス開始し、二〇〇八年より日本語も利用可能になった。パソコンだけではなく、スマートフォンや携帯電話などを使って投稿・閲覧できる。またチャットのように、ほぼ同時にメッセージをやり取りしたり、他の人のメッセージ

を簡単に引用したりすることもできる。<sup>(9)</sup>

以下にその「談話的」な性格を挙げておく。この媒体は、通常一四〇字というきわめて短い文字数でやりとりをするものである。ツイッター (Twitter) は直訳すると「さえずり」の意であるが、日本語では「つぶやき」と訳され、独自のなイメージを付与されている。しかし、それはメディアの特性から考える<sup>(10)</sup>と正しくない。

特定の個人をフォローすることで、その人の書き込みを読むことができ、また、フォローされることで、自身の書き込みもまた読まれる。このことからある程度継続的な関係性を形成する事が可能である。また、共通する人物をフォローしたり、されたりすることで、ゆるやかな集団性を形成することができる。それらの構成員は、時と話題によって変化するため、たとえていえば、連歌の「座」的な場を形成するといえる。話題を共有する集団は「〇〇クラスター」(〇〇には共通の話題や関心事が入る。例：妖怪クラスター) などと呼ばれ、周囲からもゆるやかな集団とみなされる。このような状況で書かれた文字はおのずと相互作用的なものになる。また、携帯電話やスマートフォンを用いることから、日常性、即時性を持ち、会話的なやりとりを楽しむことができる。さらには添付ファイルによって写真や動画を見せることも可能なので、「事件」の実況中継的な報告も可能になる。

このような談話的な特徴を持つ一方で、文字を用いることで、

検索、引用、反復、編集、記録が可能になるという特徴も持つ。デマを拡散する道具になる危険性も高いが、内容の吟味が可能であるため、それらを警戒、批判することも可能である。思想信条を広める道具としても有能で、その目的で使用する人も多い。

### (1) 類似の経験の束に入り込む虚構化

ツイッターが実況中継的な書き込みが可能になることは前述した。ここでは、「立ち聞き」というシチュエーションに関わる書き込みについて述べてみたい。現代の都市生活者にとって、顔見知りではない他人の談話を聞くともなしに聞く、という経験はありふれたものである。ここで、このような類似の経験の束が焦点化し、そこに虚構が入り込む過程について示してみたい。このことは、「都市伝説」の成立過程を考える材料にもなる<sup>(11)</sup>。

このシチュエーションについての興味は、筆者がフォローしている相手が「さっきマック(引用者注：ファースト・フード店マクドナルド)で女子高校生が話していたんだけど」で始まる書き込みをRT(他の誰かの書き込みを再投稿すること)したことに始まった。最初に気付いた時は、会話の中身は「彼氏との別れ話」というありふれたものであったが、「立ち聞き」をモチーフとして心にとめてみると、あり得ないものが混じっており、その数も増えていることに心付いた。二〇一二年五月一日に「女子高—マック」で検索すると、Togetter<sup>(12)</sup>というツイッ

ターの編集サービスで「マックで隣に座ってた女子高生の会話がすごかった」、「さっきマック(マクト)で女子高生がまとめ」の二つのまとめがすでにできていた。

前者は二〇一〇年八月九日一三時四六分二三秒から一四時一六分一七秒までの間に一四件の書き込みがあり、それに対するコメントは四一件であった。ここでは、女子高生の恋愛話を書かれ、コメントはこの書き込みを事実譚として遇していた。後者は、二〇一二年一月九日一六時二六分五七秒から一七時二二分三〇秒の間に二八一件の書き込みがあった。

その中のものは例えば「さっきマクトで女子高生が『彼氏が行為無価値使ってたんだけど』『マジで別れた方がいいよ』『そうだよね…私も刑法は倫理規範じゃないよって何度も言っているんだけど』『そういう問題じゃないよ、遡及禁止論使わない男とかあり得ない』とか言っていた」とあるように、明らかな虚構である。

ここでは、「女子高生の会話を立ち聞き」という枠組みを「定型」として認識した後に、できるだけ違和感のあるものを入れる「遊び」が発動している。このシチュエーションでの書き込みは、単純な事実譚、話を「盛った」(大げさにした)もの、完全な虚構、までのグラデュエーションがある。二〇一二年一月九日には個人のブログで「マックの女子高生メソッド」他、発言の責任を架空の人物になすりつけるメソッドまとめ」が立てられていた。

さっきマックで隣の女子高生が話してたんだけど、「マック女子高生メソッドは(1)女子高生というパスワードが注目を引く(2)発言の責任を架空の女子高生になすりつけられる(3)女子高生と発言内容のギャップで笑いが取れる」というメリットがあるんだよ」と事細かに説明し、て思わず感動した<sup>(14)</sup>

と記されている。ここでは話型の認識の上に、話法の認定とその効果までが分析されている。「話法」という日常の中に埋め込まれているものが、ネット上での記録、検索、引用、編集といった操作を経て反省的な思考の対象となっているのである。

このような「遊び」は都市生活者のありふれた「日常」を虚構化するもの、言い換えれば「都市伝説化」するものといえよう。

## (2) 批判／揶揄としての「都市伝説」

二〇一三年現在、多くの人々にとってマクトナルドの猫の肉の話であれ、消える乗客の話であれ、「都市伝説」と認定された話は「笑うべきもの」とされている。その認識を逆手にとって相手の話を「都市伝説」とラベリングすることで、話を無効化する話法が存在する。

二〇一二年五月二日に筆者のTL(ツイッター)において、投稿されたごく短い文を時系列に表示したもの(に次のような「つ

ぶやき」がRT（再投稿）されていた。「給食費払ってるから、給食に『いただきます』を言う必要ない（いただくわけじゃないから）っていう親からの意見を受けて、太鼓とかの合図で食べるようにした、って話聞いて、あ、この国は減びるんだな、って思ったよね。<sup>15)</sup>

同日に「給食費の話！すごい反響（顔文字）何県とか分からないです…。デマとか作り話なのか？私も裏とったわけじゃないので正直分らないです。私が釣られたのか？お騒がせして申し訳ないです（顔文字）」という書き込みがあり、翌日には、「給食費の話、永六輔のラジオが元になっている、都市伝説だ」という説もあるみたいです。調べもせず軽率な発言、すみませんでした。『どこの小学校だよ？』って気付かなくちゃいけなかったですね。ごめんなさい。これにて、給食の話は、終わり。あとは通常運転。」という書き込みがあった。その後、「はあ。すげーびっくりしたわ。自分の発言に色んな方が意見して下さって、もう、ほんと正直怖かった（笑）。幸い、大方賛同下さったんだけど、ぶっちゃけ、それも怖かったし（顔文字）かと言って、反対ばかりだったら twitter 辞めてたね（爆）。超心臓弱い（笑）」と心情を吐露している。

この書き込みは、ツイッターのRT（再投稿）機能で、通常のフォローを大幅に超える人々に彼女の書き込みが共有され、その反響が彼女の「身の丈」を超えたことを示している。

実際にはこの問題は、二〇一二年六月二日の検索の時点で、

①「学校給食のとき『いただきます』を言わせるな？」<sup>16)</sup>、②「学校給食のとき『いただきます』を言わせるな」の学校は実在するのか<sup>17)</sup>の二種の together のまとめと、③「赤木智弘の顔眼光紙背」いただきますを言わず、笛や太鼓で給食を食べる学校って、本当にあるの<sup>18)</sup>というブログが存在し、その内実が検討されている。ネットの検索機能の発達は、さまざまに「ありそうな話」に根拠を求める態度を生み出したといえる。

その結果、この話は、作詞家でタレントの永六輔が、一九九〇年代後半には話題にしていること、二〇〇六年八月七日の第一回新潟食育推進会議事録に掲載されていること、二〇〇五年十一月一日、二〇一一年八月八日の朝日新聞読者投稿欄に投書されていることが分かった。

①は二〇一一年八月二日にまとめられ、八二〇件の書き込みがある。その多くはこの書き込みの内容への違和感や怒りであり、この話を「都市伝説」とする書き込みは二件のみである。しかし、その六日後にまとめられた②では、七三件の書き込みがあり、これを「都市伝説」と評するものは六件であった。また、このまとめに対するコメントとして、八月九日には「ソースが伝聞なのか。都市伝説であってほしいなあ」(Lope Jw2011氏)、一〇日には「都市伝説化？タクシーの居なくなる客（青山墓地）とかと同じ？」(TJuckdragon氏)、十一日には「都市伝説に立つ」として、浄土真宗の多い北陸方面で「合掌していただきます」を言うことが問題になったこととの関係を示唆する

書き込み (gryphonjapan 氏) がある。<sup>19)</sup>

このような事例は、「道徳的」を装うニュースソースの明かではない話を「都市伝説」と評することで揶揄し、無効化している例と言える。しかし②のまとめからはこの話は遅くとも一九九七年頃から使い回され、何度も「最近の話」として浮上してきていることが分かる。したがって、これは「同時代に信じられていること」の根強さを示す資料ともなっている。「都市伝説」の語は、一見教育的な言説、同時代を批判する懐古的な言説に対して向けられるとミス・マッチな印象を与えるが、それだけに大きな批判力を持つ可能性を秘めているといえる。そのような領域の話を怪しげなホラー領域の話と同等に見せしてしまうところが、この語彙の持つ批評性といえよう。

### (3) 都市伝説的な表現と「笑い」

「都市伝説」が陳腐なもの、笑うべきものとして遇されているからこそ、そのラベリングが揶揄、批判となる話法を見てきたが、もう一つの話法として、「都市伝説」に特徴的なことや表現を出すことで、場を茶化したりなごませたりするという話法がある。

「都市伝説」から派生したムーブメントとして「学校の怪談」ブームがあった(「一柳 二〇〇五」)。生活世界の中にあつた子どもたちの世間話が口承文芸の研究者を通して一九八〇年代後半から一九九〇年代前半に「学校の怪談」として対象化される

と、子ども向けの読み物、ホラー系小説、映画などの大衆文化と結びつき、大きなブームとなった。一九八〇年代以降に生まれた人たちはこのブームの中で育っている。

二〇一二年五月二七日に、筆者のフォローしている若い母親と一人の女性が険悪なやりとりを始めた。相手の女性の書き込みを遡って見てみると、二〇一一年一〇月二四日から通勤電車にベビーカーを乗せる若い母親たちを執拗に批判していることが確認できた。ベビーカーは電車の中では畳むのが「常識」とする年輩の女性と、子どもを抱いて畳む方が危険と考える(ちなみに公的な交通機関ではこの考え方の方を採用している)若い母親たちは、お互いの陣営を巻き込み、それぞれの言い分をRTしあつた。やりとりが殺伐としてくる中で、六月一日に次のような書き込みがあつた「ベビーカーのための人(長すぎるから略称を考えたい)」。それに対して「ギョッと縮めて『ためさん』または愛を込めて『ためちゃん』」(dora0227氏)「一気にトイレの花子さんぽくなった」(TornetB氏)「存在自体怖いので、都市伝説っぽい怖さを含む『ためさん』に一票(これ何のイベントなんです?)」(fukumaru3氏)。

核家族で子育てに奮闘する若い母親に対する社会の無理解も、毎朝の通勤電車の過酷な状況も今日的な問題であり、その解決の兆しは見えない。このような出口のないところでの論争に、唐突に子どもたちの怪談に出てくるような稚拙な名前を出すことで、膠着した「場」がなごんでいる。一方ではこのやりとり

は、顔の見えない論争相手をモンスター化する危険性もはらんでいる。

ともあれ、これらのやりとりを支えているのは、世代の近い人たちに共通する「基礎的な教養」ともいべきものである。「都市伝説的」なものの言いや表現はもはや、その程度には浸透しているといえる。

#### (4) 自己の「経験」を超える事実への評価

「都市伝説」は、自身の「生身」を担保として、生きられた「経験」から一回り外のできごとを語る「話」である。それゆえ、「あり得る」と信じられる範囲の「話」である一方で、確かめようのないこと、が特徴であった。

この性質を逆手にとつて「確かめ得ないこと」をすべて「都市伝説」よばわりする話法が存在する。

具体例を挙げていこう。二〇一二年四月二四日のTLに「有給休暇って、都市伝説ですよね」(GOTH308氏)という書き込みがあった。二五日には「リゲイン(引用者注…第一三共ヘルスケアが扱う栄養ドリンク)のテーマが初出した時(引用者注…一九八九年発表。日本がバブル景気の時代)は、まだ有給休暇が都市伝説じゃなかったんだなあ。」(Betan(TCS氏))という書き込みがあった。四月二七日に「有給ー都市伝説」で検索すると二一件の書き込みが、「ポーンサー都市伝説」では八件の書き込みがあった。その中には、「代休ってなんですか」「都市伝説のひとつ

です。似たようなものに、有休というのも聞いたことがあります」「私はポーンサーという不思議な言葉も聞いたことがあります」というやりとりがあった。

似たような用法に「デイズニールランドでのデート」「幸せなバレンタイン・デー」などを「都市伝説」とするものがあり、自身が経験できる範囲だけが「世界」という、「身の丈の小ささ」を示して笑いを得る話法であると理解できよう。このような書き込みは一方で、不況の中で、不当な労働条件を強いられる同時代の状況を反映したものであることは言を俟たない。

経験する世界が拡大することによって「都市伝説」的な世界が現実として姿を現すことがある。就職活動中の学生であるoshanow氏は二〇一二年五月一二日に次のような書き込みをしている。

「マジで『GD(引用者注…就職試験のグループディスカッション)で意識高い系と同じテーブルになったらグループ全滅覚悟しろ』は就活本に書いとけばいいと思う。GDで『〇〇大のバツバツと申します！学生団体□□を主催し、海外でうんたらうんたらこの力をうんたらうんたら』と自己紹介始める奴は都市伝説じゃねえぞ、いるぞ」

これらの書き込みの背景にはサブカルチャーの世界の広がりがある。

自身の生きる狭い世界を全世界と認識してそのように語る若者の存在は、二〇〇二年頃から「セカイ系」と呼ばれ、ネット

の上で批判や揶揄の対象になった。その一方でアニメ作品の世界観などと絡めて現代文化論の対象となつて<sup>(20)</sup>いる。ツイッター上での「小さい世界」を生きる人物としての書き込みはそのような同時代の空気を意識しての批評性の高いパフォーマンスである、といえよう。彼等はセカイ系と評される身ぶりを「演じて」いるのである。

おわりに

口承文芸という枠組みの研究誌で、ネット上の言説を取りあげることには批判があろう。

筆者もまた、この論攷を大きな躊躇いとともに記している。しかし、ネットの書き込みに近いことを談話の中で聞いたり、日常の談話をネットに書き込んだりする「日常」は既に始まっている。そこでは匿名の書き込み、身体性のないやりとりといった一種の「虚構性」を含んだ世界が展開されている。しかし、ツイッター、フェイス・ブックといったソーシャル・ネットワークのある「日常」の談話の風景は未だ把握されていない。

本稿では「都市伝説」という語が生き生きと使用される「場」を探した結果、次のようなことが分かった。筆者の場合、その場所はネット上にあり、それは自己の経験を超えていく「話」への疑いを内包する場であった。ここでは「都市伝説」という語彙は、「使い回される言説」に対する批評性を持って機能し

ていた。また、自身の「経験」をメタ化する機能も持っていた。このことは、「都市伝説」という「新語」が定着した結果、生じたものといえよう。

(注)

(1) ジャン・ハロルド・ブルンヴァン／大月隆寛・菅谷裕子・

重信幸彦訳『消えるヒッチハイカー―都市の想像力のアメリカ―』一九八八年 新宿書房

(2) ジャン・ハロルド・ブルンヴァン／行方均訳『チョーキング・ドールマン―アメリカの「新しい」都市伝説―』

一九九〇年 新宿書房

(3) 松本信広『神話伝説』社会学大系 第6巻 宗教と神話

一九四八年 国立書院、重信幸彦『食卓の向う側に』民話と文学の会編・発行『民話と文学』一九八八年

(4) 一九九〇年代後半の「都市伝説」をめぐる状況については、

〔山田 一九九八年 一四六―一四七頁〕を参照。

(5) このことは人口に膾炙したことわざを例に考察した(山田 一九九四)。

(6) さまざまなメディアが輻輳する状況を前提として「口承」の問題を捉えよう、という視角は、一九九一年の口承文芸学会のシンポジウム(「口承」研究の現在―ことばの近代史のなかで―)で示された〔筑波大学歴史・人類学系研究室 一九九一〕。

- (7) 鶴見の限界芸術論を口承文芸論として論じたものに以下の論攷がある。口承文芸と文芸、文学との関係を論じたものに〔小池 二〇〇〇〕、近代文芸との関わりで読み取ったものに〔川森 二〇一三〕がある。一方、限界芸術論を補助線として大衆文化としての口頭芸と民俗文化との関係を論じたものに〔真鍋 二〇一三〕、ことわざを美的な創作物として扱う際の参照枠として示したものに〔山田 二〇一三〕がある。
- (8) サブカルチャーの中の「知識」を「場」に合わせて、引用、上演する若者については〔山田 二〇〇五〕を参照のこと。
- (9) <http://support.twitter.com/groups/50-welcome-to-twitter#> 二〇一二年二月一日検索
- <http://dictionary.goo.ne.jp/leaf/jn2/146087/m0u/%E3%83%84%E3%82%A4%E3%83%83%E3%82%BF%E3%83%BC/> 二〇一二年二月一日検索
- (10) 実際にはURL〔uniform resource locator〕の略。インターネット上の情報資源の場所とその属性を指定する記述方式〕を示すことでそれ以上の情報を交換することが可能である。
- (11) 筆者は、「うわさ話と共同体」〔山田 一九九九〕の中で類似的経験の束の中に結構の整った虚構の話が入り込み、リアリティを獲得してゆくことを、若い女性のうわさ話を例に示したことがある。
- (12) ツイッターでの発言を任意の順序に並び替えたり、取捨選択したりして一覧表に表示できるサービス。 <http://togetter.com/> 二〇一二年二月一日検索
- (13) 二〇一二年一月九日の書き込み。書き込み主はアカウン ト名 allowoia 氏
- (14) [http://blog.shojiniyata.com/joke/mac\\_jik.html](http://blog.shojiniyata.com/joke/mac_jik.html) 二〇一二年五月一日検索
- (15) 書き込み主は usamin405 氏
- (16) <http://togetter.com/#/171994> 二〇一二年五月九日検索
- (17) <http://togetter.com/#/172561> 二〇一二年五月九日検索
- (18) <http://blogs.com/article/23503> 二〇一二年五月九日検索
- (19) 注 (17)
- (20) さしあたり〔前島 二〇一〇〕を参照のこと。

#### 参考文献

- 一柳廣孝「はじめに―『学校の怪談』という問題系」一柳廣孝 編著『学校の怪談はささやく』二〇〇五年 青弓書房
- 大月隆寛「解説『都市』とフォークロア」ジャン・ハロルド・ブルンヴァン／大月隆寛・菅谷裕子・重信幸彦訳『消えるヒッチハイカー―都市の想像力のアメリカ―』一九八八年 新宿書房
- 大島建彦「世間話のとらえかた」『西郊民俗』第二五号 一九六三年 西郊民俗談話会

大田区大田区社会教育部編『大田区の文化財 第二二集 口承

文芸(昔話・世間話・伝説)』一九八六年 東京都大田区教育委員会

川森博司「柳田の口承文芸論と柳田以後の昔話研究―伝承と社

会の変化を視点にして―」日本民俗学会編・発行『日本民俗学

二七〇号「特集 柳田没後五十年と口承文芸―生前・没後の

研究状況―」二〇一二年五月

グローマー、ジェラルド「幕末の瓦版と読売のパフォーマンズ」

『幕末のはやり唄 口説き節と都々逸の新研究』名著出版

一九九五年

小池淳一「世間話研究の可能性」世間話研究会編・発行『世間

話研究』第一〇号 二〇〇〇年

筑波大学歴史・人類学系研究室編・発行『口承』研究の現在―

ことばの近代史のなかで―』一九九一年

鶴見俊輔『限界芸術論』一九六〇年 一九九九年 ちくま学芸

文庫

徳川夢声「落語少年」『世界教養全集』第35巻 一九六二年 平

凡社(木下順二編)『日本の名随筆 52話』一九八七年 作品

社に再録)

中島恵子「都市化地域の昔話・伝説・世間話」昔話研究懇話会編『昔

話―研究と資料―』第二三号 一九八四年 三弥井書店

西沢爽「ニュース歌謡時代(大正瓦版歌謡時代)」『日本近代歌

謡史下』一九九〇年 桜楓社

日野龍夫「世間咄の世界」『江戸人とユートピア』一九七七年

朝日新聞社

前島賢「セカイ系とは何か ポスト・エヴァのオタク史」

二〇一〇年 ソフトバンク新書

真鍋昌賢「語り物」から「口頭芸」へ」日本民俗学会編・発行

『日本民俗学』二七〇号 二〇一二年五月

山田巖子「ことわざの効力―定型と笑い―」世間話研究会編・

発行『世間話研究』第五号 一九九四年

山田巖子「口承文芸」国分寺市教育委員会文化財保護課編・

発行『国分寺市の民俗五 本多新田・恋ヶ窪村の民俗―』

一九九五年

山田巖子「(世間話)としての(うわさ)―世相を読み解くため

に―」宮田登編『民俗の思想』一九九八年 朝倉書房

山田巖子「うわさ話と共同体」岩本通弥編『覚悟と生き方』

一九九九年 ちくま新書

山田巖子「社交とふるまい―学校という舞台―」柳廣孝編著

『学校の怪談はささやく』二〇〇五年 青弓書房

山田巖子「世間話とうわさ」日本口承文芸 学会編『ことばの

世界 第三巻 はなす』二〇〇七 三弥井書店

山田巖子「ことわざ研究の射程」日本民俗学会編・発行『日本

民俗学』二七〇号 二〇一二年五月

(やまだ・いつこ)／弘前大学